

下地 賀代子

0 はじめに

多良間島は、宮古島と石垣島のほぼ中間に位置する楕円形の小さな島である。防風林の役目も担うフクギ並木が大変美しく、1400名余り(平成15年5月現在)の人々が、日々の生活をこの島で営んでいる。行政区分上、その北方約12kmのところにある水納島とともに、多良間村という一つの村を形成している。主島である多良間島は集落の中央を走る境界線道路の西と東とで、それぞれ仲筋(方言ではナカスズ[nakasuzi])と塩川(方言ではシュガー[suga:])の二字に分かれ、水納島は水納字となる。

「多良間方言」⁽¹⁾とは、この多良間島の仲筋と塩川及び水納島で話されていることばの総称である。だが本稿では、そこに水納(島)を含めず、また塩川と仲筋の区別も行っていない。その理由として、まず水納島の扱いについては現在1世帯が生活しているのみであることが挙げられる。塩川と仲筋については、両字に生活する人々の触れ合いが日常茶飯事であること、さらに言語的に、語彙レベルでの音韻的な対立が見られつつも混同が多く、またそれぞれの文法体系にほとんど差異が見られないこと等が⁽²⁾挙げられる。

本研究の目的は「多良間方言」(以下単に多良間方言)の待遇表現⁽³⁾についての記述であるが、今回は動詞形態論の視点から、敬体動詞の文法的意味の記述を中心に行なっている。

敬体動詞とは、目上、また疎遠な人物に対して用いる敬意を含む動詞を指し、多良間方言ではこの敬体動詞と、同等、目下、親しい人物に対して用いられる普通体の動詞(常体動詞)とが厳密に使い分けられている。なお、共通語の～マスに相当する丁寧体は現れない。敬体動詞はさらに<尊敬動詞>と<謙讓動詞>とに分けられ、それぞれに、語彙的に尊敬・敬讓の意味をもった敬体語彙動詞)、また文法的

なてつづきによって形作られた敬体複合動詞)とがある。なお、この方言の文法的な敬体動詞には、共通語のヨマレルに対応するような派生動詞は現れない。

以下、尊敬動詞、謙讓動詞それぞれの敬体語彙動詞、敬体複合動詞の意味・用法の記述を試みていく。また<サービス>の方向性に関わりつつ、独自の敬体語彙動詞・複合動詞を示すやりもらい動詞についても、本稿で取り上げて扱うこととする。ここで用いられている用例は主に、1999年8月～2000年10月、2001年8月～2002年2月に行なった二回の調査によって得られたものであるが、明治から昭和初期の出生者をインフォーマントとし、1977年から1978年にかけて宮古民話の会によって採集された民話を集めた『多良間村の民話』(多良間村1981*仮名書き)からも、その音価の推定が可能なものに限って用いている。上記調査の主なインフォーマントは(故)下地竹、清村シゲ氏、親里カマ氏、本村ヨシ氏、渡久山春好氏、(故)花城朝秀氏である⁽⁴⁾。

1 尊敬動詞

1-1 敬体語彙動詞

イク、クル、イル、イウに相当する動詞の尊敬語形には語彙動詞の/wa:L⁽⁵⁾のみが用いられ、派生動詞は現れない。よって、共通語と異なり、スル、ミル、キル(着る)に相当する動詞の尊敬語形に語彙動詞はなく、複合動詞のみが尊敬動詞として用いられている。またこの/wa:Lは、尊敬を表す敬体複合動詞の補助動詞としても用いられる(1-2)。なお、この語は強変化タイプの動詞⁽⁶⁾と同様の活用を示す。

・イク(行く)

kunu micü: masu:gu wa:Ltaka:, jakuba: umaN aL. この道を真っ直ぐいらっしゃったら、役場はそこ

にある。

qva: ja:maNke:ja wa:ramaN(ノ). あなたは八重山へ
はいらっしゃらない?

sju:tu uMmatu wa:riqti:du, sju:ja jamaN tamunu siga
wa:riqti:. お爺さんとおばあさんがいらっ
しゃってぞ、お爺さんは山に薪しに{*薪取り
に}いらっしゃって、

・クル(来る)

sjuNcjo:sju:gadu wa:L. 村長さんがぞ(こちらへ)い
らっしゃる。

hai, migaaNga wa:riqta(ノ). ねえ、ミガ姉さんはい
らっしゃった?

kumaNke wa:ri panasigamauba sjuda: Mme:. ここへい
らっしゃって話をばしたら、もう。

・イル(居る)

siNsi:gadu wa:L(ノ). 先生がぞ(そこに)いらっしゃ
る?

unu so:heisiNsi:ga wa:raNni: himati ari:, そのそうへ
い先生がいらっしゃらないから(今日は)暇と
だから、{*と知っているから}

sju:tu uMmatu wa:riqti:du, sju:ja jamaN tamunu siga
wa:riqti:. お爺さんとおばあさんがいらっ
しゃってぞ、お爺さんは山に薪しに{*薪取り
に}いらっしゃって、

・イウ(言う)

qvata nu:ti i:tari:, qvata nu:tiga wa:tari:. あなた達(の
屋号)は何と行ったから、あなた達(の屋号)は
何とおっしゃったから。

kumaN M:na tuqru abiri: mi:ti: wa:Ltari:. (その叔父
が)ここに皆鶏を呼んでみると(豊見親に)仰つ
たので、<民>

タベル・ノムの尊敬語彙動詞には、/NkagiL/
/sikiL(sikiraiL)/⁽⁷⁾(召し上がる)の2種が見られる。
/NkagiL/について、聞き手が敬意の直接の対象とな
る場合は、以下の最初の用例に見られるように、
/-wa:L/がさらにくみあわさって用いられることが多
い。なお、この/NkagiL/は弱変化タイプの動詞⁽⁸⁾と
同様の活用を示す。

・/NkagiL/

nu:Nka:N NdasitaLba, kaMganasiNmai usjagi, mata muti:
wa:ri, baNmai ugamaqzi:, qvatamai Nkagi: wa:ri,
(お正月のご馳走を)何もかも出したので、神
棚にも捧げ、また(残りは)持って来なさい。私
も頂くから、あなた達も召し上がりなさい。<
民>

aNsi:, si: wa:raNne:mai zjo:buNti: kaMganasē: cja:ja
Nkagiqte:. そのように、しなさらなくても構
わないと神加奈志{*神様}はお茶は{*を}召
し上がって、<民>

du:ga ujanu sjakizukina pitu: situi, sjaki nuM buqsati wa:ri:
buLba, sjakiu tumi: Nkagiqsati: ma:ri:Lke:, 自分

の親が酒好きな人をして{*酒好きな人で}、酒
を飲みたいとおっしゃっているの、酒を探
して召し上がらせようと(山中を)回っている
までに{*探し回っている時に}、<民>

uLkaradu gaNjakuti: taramaNja ja:kazu ku:sju: uNsjuku
cuqfi: wa:ritui, NkagitaL:ti:. それからぞ、眼薬
と(して)多良間では家毎<に>唐辛子をうん
と作りなさい、{*作るようになり}召し上がっ
たと。<民>

narata: ka:munu ari:du tusiwasurimai siraiNgtu buL, de:
de:, juguL cjavaNsi: arabaM, cja: siki:ti:, kumari:
kitaL pito:, cja:ju umagi nari: Nkagi:. 自分たちは
貧しい者だから年忘れ{*年越し}もできない
でいる、さあさあ、汚れ湯飲み{*汚れた湯飲
み}でだけど、お茶を召し上がれと(客に勧め
た)。入ってきた人は、お茶をおいしそうに召
し上がって、<民>

/sikiL(sikiraiL)/について、その出現は/NkagiL/に比
べて非常に稀である。後の用例のように、語彙・複
合動詞のいずれとしても捉え得る、謙讓動詞として
も用いられ得るようだが、尊敬動詞としての用例も
少ない現状ではそれも明確にはできない。なお、高
橋(1993)では「食べる・飲むの最敬語」(p112)と位置
付けられている。

・/sikiL(sikiraiL)/

narata: ka:munu ari:du tusiwasurimai siraiNgtu buL, de:
de:, juguL cjavaNsi: arabaM, cja: siki:ti:, kumari:
kitaL pito:, cja:ju umagi nari: Nkagi:. 自分たちは
貧しい者だから年忘れ{*年越し}もできない
でいる、さあさあ、汚れ湯飲み{*汚れた湯飲
み}でだけど、お茶を召し上がれと(客に勧め
た)。入ってきた人は、お茶をおいしそうに召
し上がって、<民>

sju:ja, cja:ju fukasi: ki: siki:ru:ti: uMmaNke: i:badu, cja:ja
fukasi kiqti:, おじいさんは{*が}、(お客様に)
お茶を沸かしてきて、(?)差し上げるとおば
あさんへ言うので、(おばあさんは)お茶を沸
かしてきて、<民>

1-2 敬体複合動詞

尊敬動詞の敬体複合動詞は、(常体)動詞の第一中
止形をもととし、補助動詞/-wa:L/がくみあわさって
形作られる。

ju:biNkjokucjo: si: wa:riqta sja(ノ), ano ozi:ja. 郵便局
長をしなさったでしょ、あのおじいさんは。
mida uki:kuNtu i:ba, are azukari:tu uki: kitaL turasi: wa:ri
jo:, トアズケテキタ。(姉さんは)まだ起きて
こないというから、じゃあ預かってと、起きて
きたら取らせなさってねト、(ハルコに)アズ
ケテキタ。

ka:dinu obasaNja ifucuga nari: wa:Lba. カーディのお

ばさんはいくつになりなさるから。

またコピュラ的な/aL/(である)について、一デイラッシュアルに相当するような語彙動詞は現れず、複合動詞のみが用いられる。

oba:ja idaja:nu oba:ga ari: wa:Lti izi:buL do:. おばあさんはどこ家[㊟]のおばあさんでありなさるか { * いらっしゃるか } と言っているよ。

1-3 敬意の対象について

尊敬動詞は、語彙動詞、複合動詞ともに主語としてあらわされる動作主体への敬意を表す。尊敬動詞の主語となるのは主に、目上や敬遠される人物など具体的なモノ(ヒト)であるが、神や先祖といった、信仰の対象となる抽象概念も敬意の対象となる。

・話題の人物

susi:du wa:ri: araN(♂), migaaNga taigaigama. (その歌なら)知ってぞいらっしゃるんじゃない? ミガ姉さん(は)大体は。

ujamai Mmamai sjuri: wa:riLsja:. お父さんもお母さんも元気でいらっしゃるでしょ?

hacizju:go:nu tuLduiu mukae wa:ri uki sa:. araN(♂)Mme. (おばあさんは)85(歳)の酉年を迎えなさっておくでしょ、ちがう?もう。

・聞き手

si:, kikasi: wa:rada:. そうよ、(あなたの歌を)聞かせなさってよ。

aga kuija kiki: wa:riLM(♂). 私の声は聞こえなされますか?

uja, be:ta: icuga naNneN NdaNga ukina:Nke: kusi: wa:ri:,ti:, お父さん、私たちはいつ、何年に(沖縄の)どこにか、沖縄へ越しなされたか、と、

・抽象概念

sjo:gacunu wa:Ltare:ja, mi:dusinu wa:Ltare:ja, お正月がいらっしゃいました、新年がいらっしゃいました <正月エーグ>

kanagaikara usi, nu:manu Nna:nu karamaki:taka: ta:ga usi, nu:ma arabaM, no:si:, naLtika: fusjanu aL tukuruNke: p̄kima:sidu, kaMgasasé: mi: wa:Ltinu munu. 昔から、牛、馬の綱が絡まっていたら、誰の牛、馬であっても、直して、なるなら { * できるなら } 草のあるところへ引き回す { * 連れて行く } と、神加奈志 { * 神様 } は見ていなさるというもの { * ことだ }。 <民>

kanagai aNsi:du bo:cjo:riNti kadi fukunu kakiti: ki:u maNmaN uiqsi: wa:LtaL. 昔(先人達は)その様に抱護林って、風が吹くの(を防ぐ)垣と { * 垣として }、木をマンマ { * 海岸沿いの土手のように盛り上がった箇所 } に植えなされた。

また敬意の対象となるモノ(ヒト)に属するモノ(ヒト)が尊敬動詞の主語となって、間接的に敬意が表

される用法も見られる。なお後の用例は、「歌」ではなく(不定の)歌い手に対する敬意であるようにも思われる。

・間接対象

micigama mo:ke nari: wa:riqtaqru. (カーディヤ { * 家を指している } は小学校の)道向かいになつていらっしゃったよ。

nagajamaja:nu sju:ja, taramanu sjo:gacukudukü: cuqfi: wa:ri:, namamai ju:zjuNja si: wa:L. (昔)ナガヤマヤーのおじいさんは、多良間の正月口説を作りなされた、(その歌は)今も祝い(の時)にはしなさる { * 歌われなさる }。 <民>

2 謙讓動詞

動作主体である話し手が、自身のおこなう動作をへりくだって言うことによって、動作の受け手に対する敬意を表す時に用いられる動詞を謙讓動詞と言う。共通語では謙讓動詞が用いられることの多い場合においても、この方言では常体動詞で表されるのが一般的である。よって観察されてはいるものの、この種の動詞の使用頻度は極めて少ない。

2-1 敬体語彙動詞

謙讓を表す語彙動詞は少なく、今のところ、サシアゲルやササゲルに相当すると思われる /we:si/、 /usjagiL/ が観察されるだけである。なお、 /we:si/ は尊敬を表す /-wa:L/ と同じく補助動詞としても働く (2-2)。

・ /we:si/

reNti:nu munumai, kanagaija, ju:zju, pi:zjuNja, nubasi:maidu kabü: tumi: ki:mai, kazjari: we:sitaL sja. 「聯」とのものも、昔は、祝い、忌み事(?) には、どのようにもぞ紙を探してきてでも { * 何が何でも探してきて }、飾って(神様に)捧げたよ。 <民>

a:, bagadu Nnau muti: buL, de:ti, we:si: wa:Ltikara:du, (このお爺さんは)ああ、私がぞ綱を持っている、さあと、(その男に)差し上げなさるので、 <民>

・ /usjagiL/

mainu ju:kara, nakadaNka, asidari, cucubidari si: butaL jume:, sjo:gacunu sutumuti, ujaMmanu maiN, sjakazikiu usjagiqti:, 前の夜から、台所に汗だらけ、(鍋底の)すすだらけして { * になって } いた嫁は、正月の早朝、父母の所に盃を捧げて、 <民>

pütuta:rau saNtuda:rati si:, uLga mi:ta:rau zi:nu minakaN isimuL uiNke:, misigamamai, ta:ramai misita:ra muti: ki: usjagiru. 一俵を三斗俵として、その三俵を土地 { * 畑 } の真ん中の石盛りの上に、神酒も、俵も三俵持ってきて捧げろ。 <民>

次の用例では/usjagiL/が補助動詞として機能しているようにも見える。だが、/kaki: usjagiL/のように用いられないことから、「<モノを>捧げる」という語彙の意味は失われておらず、補助動詞化しているとは言えない。

futa:Lja Mmegamati:, pukarasjau si:, kure: jakuniNnu MmeNke:mai, baki: usjagidaka: naraNti:, haNbuNja jakuniNnu MmeNke:, (黄金をもらった) 2人は本当に充分すぎると、喜んで、これは役人の方々へも、分けて、()差し上げなければならないと、半分は役人達へ、<民>

2-2 敬体複合動詞

尊敬動詞の場合と同じく、(常体)動詞の第一中止形に/-we:si/が後接して形作られる。

aga kaki: we:si. 私が書いてさしあげます。

agadu kiki: we:siqzja. 私が聞いてさしあげましょう。

3 やりもらい動詞

この方言のやりもらい動詞は、形態的に、クレルとモラウにそれぞれ対応する/qfiL/と/juiL/との二項対立を示している。これは与え手、受け手のいずれが主語となるかによる対立である。だが発話者=動作主体である場合、その動作の受け手に対する待遇表現にはヤルの謙譲語彙動詞サシアゲルに相当する/we:si/が用いられ、またそれがクレルの敬体動詞とならないことから、意味的にはヤルとクレルという使い分けがあると考えられる。このような、形態上は二項対立であるのに対して意味上は三項対立であるという構造は、八丈方言のkerewa(クレル)とmurouwa(モラウ)の対立と同様である(金田2001:349)。

以下、常体動詞も含めつつそれぞれの用法を示していく。

3-1(シテ)ヤル、(シテ)サシアゲル

動作の与え手が主語となり、その<視点>から、受け手へ向かう動作であることを表す。よって、待遇表現では謙譲動詞が用いられ、常体動詞が述語となる場合は<目上>から<目下>への、また敬体動詞が述語となる場合は<目下>から<目上>への働きかけを表す。

・常体動詞-本動詞

ara:kara i:daM sitaka: ho:biu qfizi. 正直に言いさえしたら褒美をやろう。

jakuniNkara, tihoNnu si:niN ari:, kunu si:niNnu buqsa:L munu: nu:mai qfidaka: naraN, nuziM mamamu munu: qfi, ti:nu kutu:ba si:, karu: abiri: panasitaLti:. 役人から、手本の{*皆の手本になる}青年だから、この青年の欲しいものを何でもやらなければならない、望むままのものをやろうとい

うことをばして{*ということを決めて}、あれ{*青年}を呼んで(そのことを)話したと。<民>

・常体動詞-補助動詞

uL upaganu munukara, we:tuga:L turaiL, cuqfe: qfiL. それ(は)大きいものから、~(?)とれる、作ってやる。

また、話し手が第三者であり、主語となる与え手が話し手にとって<目上>である場合は、さらに/-wa:L/が後接して尊敬複合動詞の形を取る。なお、/qfi: we:si/のような謙譲複合動詞は用いられない。

asjugadu, du:ja tamunu: si: ki:nu kurasu: si:nagaramai, du:ga simanu niNgiNnu Mmeu, uNsjuku migumi: qfi: wa:LtaLti. だけど、自分は薪をしてくるの暮らしをしながらも{*薪取りで生計を立てる生活をしながらも}、自分は島の間人達をうんと恵んでやりなさったと。<民>

先述したように、動作の受け手に対する待遇表現には、ヤルの謙譲語彙動詞サシアゲルに相当する/we:si/が用いられる。

・敬体語彙動詞(本動詞)

a:, bagadu Nnau muti: buL, de:ti, we:si: wa:Ltaka:du, (このお爺さんは)ああ、私がぞ綱を持っている、さあと、(その男に)差し上げなさるので、<民>

・敬体複合動詞(本動詞)

aga kaki: we:si. 私が書いてさしあげます。

3-2(シテ)クレル、(シテ)クレナサル

動作の与え手が主語となるが、<視点>は受け手にあり、与え手から受け手へ向けられる動作であることを表す。その待遇表現には尊敬動詞が用いられるが、この方言では、本動詞クダサルに相当する敬体語彙動詞は現れない。補助動詞としての(シテ)クダサルに、/-wa:L/が相当するように思われなくもないが(参考)、やはり尊敬複合動詞一般の補助動詞として扱うべきだろう。また、常体動詞で<目下>から<目上>への、敬体動詞で<目上>から<目下>への働きかけであることを表す。

・常体動詞-本動詞

ara, naraga pi:se: agi: kamisisaba, miduMqvau baN: qfiM: na. では、自分が{*私が}(そのざるを)拾い上げて(あなたに)担がせたら、娘を私にくれるね? <民>

taramafucü: kiki: qfitaL. (私の下手な)多良間口{*多良間方言}を聞いてくれた。

・常体動詞-補助動詞

bagadu waqsa:taL, jurusi: qfiru. 私がぞ悪かった、許してくれ。

kanarazu qvaga je:* qfiru.《*jui:>je:》必ずあなたがもらってくれ。

・敬体複合動詞（補助動詞）

ata:ma mati: qfi: wa:ri. しばらくは待ってくれなされ。

<民>

aNsi:du miduM pītunu wa:ri: siwau si: qfi: wa:ri:Lba, sudigapu:ti ume:buLjo:. こんな風に女の人がい
らっしゃって(私の身の回りの)世話をしてく
れなさっているから、ありがたいと思ってい
るよ。<民>

* 参考

ara, Mme baN: makasi: wa:ri. では、もう私に任せな
され{△任せて下さい}。<民>

qvaNke: nara:si: wa:LtaL pito:, kaM:du ari: wa:ri: uki,
qva: ujaNke:nu ko:ko: nu qfa aLbadu, kaMganasinu
migumi: tasuki: wa:ri: uki. あなたへ(それを)習
わせなされた{*教えなされた}人は、神にぞあ
りなさっておく{*神様でいらした}, あ
なたは親への孝行の子供だから、神加奈志{*
神様}が恵み、助けなさっておく{△助けて下
された}。<民>

3-3 (シテ)モラウ

〈視点〉はクレル、クダサルと同じく受け手にある
が、主語が動作の与え手に限らず、受け手もなり得
る点で異なる。共通語のモラウの敬体動詞はイタダ
クであるが、この方言ではそれに対応する形が現れ
ず、複合動詞も用いられないようである。

・常体動詞 - 本動詞

iki: naraga miduMqvaNke:, aNsi:du to:bo:sju:ga qvau juiti:
wa:L. (男は)行って自分の娘へ、そんな風に
ぞトーボー主があなたを貰おうとおっしゃる
(と言った)。<民>

takaramununu kugani, naMzja ari: kunu takaramunu: M:na
muti ki: acumiqti:, uru: baki: juiL ba: ari ukiga jau.
宝物の金、銀(が)あって、この宝物を皆持つ
てきて集めて、それを分けて、もらう(という)こ
とであっておこう{*あったようだ}。<民>

・常体動詞 - 補助動詞

siNsi:N pumirari juitaL. 先生に褒めてもらえた。

また、話し手=与え手であり、受け手がく目上
である場合は、ヤル、サシアゲルと同じく、さらに/
-wa:L/が後接して尊敬複合動詞の形を取る。

kunu ja:nu juminu, aparagi miduMba si: kuLN puri: ukigi
munu, asjugadu, kure: бага bunaL ari:, jui: wa:riti:nu
ba:ju si:, この家の嫁が、綺麗な女(を)して
{*綺麗な女で}、(役人は)これに惚れておくら
しい{*惚れたらしい}、だけど{*役人は嫁だ
}と思っていたけど}{(男が)これは私の妹だか
ら、もらいなされということをして{*という
}ことで/と言って}、<民>

3-4 やりもらい動詞の体系

以上の考察の結果をまとめると、多良間方言のや
りもらい(くれもらい)動詞は、次のように整理でき
る。

	ヤル	クレル	モラウ
主語	与え手	与え手	与え手 受け手
働きかけの 方向	← 向ける	→ 向けら れる	↔ 向けさ せる
視点	与え手	受け手	受け手
表現形態	qfiL	qfiL	juiL
待遇表現	謙 複合× 語彙○ we:sī サシアゲル	尊 複合○ qfi: we:sī 語彙× クダサル	話し手=与え 手の場合、尊 敬複合動詞 をとる。 謙 複合× 語彙× イタダク

【やりもらい動詞の体系】

この表から多良間方言のヤル、クレルに対応する
語については、常体動詞としての表現形態は同一だ
が、待遇表現において違いのあることがわかる。
よって既に述べてきたように、この方言のやりもら
い動詞は形態的には/qfiL/(クレル) - /juiL/(モラウ)の
二項対立を示しつつも、その意味・用法において三
項対立をなしていると言える。だが、「ヤル」という
与え手にく視点のあわされた表現が、受け手く視
点であるクレルに対応する/qfiL/によって表され
ることは、この方言の「ヤル」が、共通語のそれよ
りも受け手=相手のく視点に近いものであることの
現われのようにも考えられる。

4 結語

以上、やりもらい動詞も含め、動詞形態論の視点
から多良間方言の待遇表現についての記述をおこ
なってきた。その結果、この方言の待遇表現を表わ
す動詞は、尊敬・謙譲ともに、語彙的手段(敬体語彙
動詞)よりも文法的手段(敬体複合動詞)によるこ
ろが大きい事が明らかになった。特に尊敬を表わ
す/wa:L/の発達が目立ち、語彙動詞としてだけでは
なく、補助動詞として、複合動詞を形作る働きも
担っている。また謙譲表現について、尊敬表現と同
様の語彙的・文法的手段を持ちつつも、その出現量
は極めて少ない。これはつまり、相手を高めるとい
う直接的な表現が、この方言の敬意表現の基礎をな
していることの現れであると言える。(自らを低め、

相対的に相手を上位に位置づける謙譲表現は、いわば間接的な敬意表現であろう。)

今回は特に敬体動詞についての記述を行なったが、「待遇表現」には「敬語」という用語との関わりから始まって、語彙論との関連など、様々な観点からの研究が可能である。例えば二人称代名詞の敬語体として /uNzju/ (あなた様) という語が現れるが、これは沖縄本島方言からの借用語である。さらに、先述の /wa:L/ が、他の宮古諸方言では用いられていない事などと考え合わせると(注5参照)、多良間方言の待遇表現の発達自体が、他の言語(方言)に触発されたものだという仮説も成り立つだろう。このような影響関係も視野に入れつつ、意味論的な研究、また品詞間にまたがる、広く敬意を表す表現として捉えられる事項を含め、多良間方言の待遇表現の体系化を目指す事は、今後の課題である。

註

- (1) 多良間方言は方言区画上、宮古方言の下位とするものが主であるが、他の宮古諸方言とことなり、形容詞語尾の [-ʃa:l] 等、八重山諸方言と共通する面も見られる。
- (2) 音韻について、塩川-仲筋で /o:/-/au/ の対立が見られる。ex. 「棒」/bo:/-/bau/, 「買う」/ko:/-/kau/ また「松明」を指し示す語にのみ、/umaci/-/umuci/ のように /u/-/a/ の対立が現れている。
また「多良間方言」という総括的な扱いについて、水納もそうだが、特に塩川と仲筋の扱いについてはさらなる考察が当然求められる。文法体系についても、その細部に対立の現れる可能性を完全に否定することはできず、あくまで暫定的な扱いに過ぎない。
- (3) ここでは「待遇表現」を、次の辻村(1984:2)の定義に従って扱うものとする。

「表現主体(話し手または書き手)が表現受容者あるいは表現素材(話題の人物)と自らの間に尊卑、優劣、利害、親疎等のような関係があるかを認識し、その認識を言語形式の上に表したもの」

- (4) インフォーマントについては以下の通りである。テキスト性は問題としないため、用例が調査と『多良間の民話』のいずれによるものかによって、区別して扱うことはしていない。(なお、『多良間の民話』による用例である場合には、<民>と示してある。)

下地竹(故)(大正10年生 女性) 字塩川→仲筋
→沖縄本島 (2002年5月逝去)
清村シゲ(大正3年生 女性) 字塩川
親里カマ(大正4年生 女性) 字塩川
本村ヨシ(大正13年生 女性) 字塩川
渡久山春好(大正10年生 男性) 字塩川
花城朝秀(故)(大正15年生 男性) 字仲筋→沖
縄本島 (2003年10月逝去)

調査方法は自然傍受法を主とし、必要に応じて面接法を行った。なお、下地一男(昭和17年生 男性、字仲筋→沖縄本島)からも、細かい点についてのア

ドバイスを受けている。

- (5) この /wa:L/ が、『おもろさうし』に見られる「おわる」に通じるものであることは、既に周知の通りであろう。他の宮古方言では用いられておらず、多良間方言の尊敬動詞は北琉球方言や八重山方言に近いと言える。また、仲宗根(1976)では、独立動詞としての「おわる」が沖縄本島で滅びてしまっていることから、多良間方言や鳩間方言などを「沖縄のおもろ時代」のように称している(井上他編 2001:501)。
- (6) /wa:L/ は、/naL/ (成る, 鳴る, 為る, 実る) や /ataL/ (当てる) 等と同様の、強変化タイプの活用を示す。(肯定動詞に代表させて5つ示す。活用形の示されていないものは終止形である。)

	/naL/	/wa:L/
断定・非過去 1	na-L (なる)	wa-L
意志・勧誘 2	nar-azi: (なろう)	wa:r-azi:
命令形	nar-i (なれ)	wa:r-i
断定・第一過去 1	nar-iqta (なった)	wa:r-iqta
条件形仮定法	nar-aba (なる なら)	wa:r-aba

- (7) 用例不足で基本形も明確にできていない。なお、インフォーマントによっては借用語と感じられるようである。
- (8) この方言の弱変化タイプ動詞は、次のような活用を示す。(注6に同じ。)

	/ukiL/	/NkagiL/
断定・非過去 1	uki-L (起きる)	Nkagi-L
意志・勧誘 2	uki-zī: (起きよう)	Nkagi-zī:
命令形	uki-∅ (起きろ)	Nkagi-∅
断定・第一過去 1	uki-qta (起きた)	Nkagi-qta
条件形仮定法	nar-aba (起きるなら)	wa:r-aba

- (9) 多良間では戸籍上の名字ではなく、屋号によって個人の「家」を特定する習慣があり、それは今でも根強く残っている。屋号は[-ja:](～家)のように称される。よってこの場合も「おばあさん」の「家」の屋号を尋ねている表現となる。

参考文献(50音順)

- 金田章宏(2001)『八丈方言動詞の基礎研究』笠間書院
高橋俊三(1993)「多良間島の語彙(中間報告)」(『多良間島調査報告書(1)』地域研究シリーズ19 沖縄国際大学南島文化研究所)
辻村敏樹(1984)「待遇表現」(鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法9 敬語法編』明治書院)
仲宗根政善(1976)「宮古および沖縄本島方言の敬語法」(『沖縄—自然・文化・社会』弘文堂)
*井上史雄他編(2001)『日本列島方言叢書29 琉球方言 孝② 琉球列島一般(文法)』(ゆまに書房)所収